

## HTLV-1 Meeting in China (2014.1.13-17、厦門大学基礎医学院神経科学研究所)

### 参加報告

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科先進治療科学専攻  
腫瘍学講座人体がん病理学分野・講師  
蓮井和久

平成 25 年度は、出雲周二教授が代表研究者である中国の HTLV-1 関連疾患発生の実態調査を目的とした基盤研究 (B) 海外学術の研究分担者として、平成 26 年 1 月 13 日 (月) ~ 17 日 (金) の日程で中国福建省厦門 (アモイ) を福岡経由上海経由で訪ねた。

今回の HTLV-1 Meeting in China の日本からの参加者は、鹿児島大学の代表の出雲周二教授、久保田龍二准教授、吉満誠准教授、前鹿児島生協病院病理部長の奥村晃久先生、国立歴史民族博物館の日高薫教授、前 KTS・南日本新聞社長の日高旺氏と私の 7 名であった。

今回は、厦門(アモイ)大学の病理学教授で今鹿児島大学医歯学総合研究科の難治ウイルス疾患病態席魚研究センターの外国人教員であるケイ恵琴教授と出雲教授の共同研究の 3 年計画の初年度であり、福建省における HTLV-1 関連疾患の発生の実態を把握しようとするものである。まずは、HTLV-1 関連疾患の解説の意味で、HTLV-1 Meeting in China を開催しようとするようになったものである。出雲教授によると、従来から台湾では HTLV-1 関連疾患の発生が報告されており、厦門 (アモイ) の目と鼻の先である台湾の金門島では HTLV-1 関連疾患の発生があると共に HTLV-1 キャリアーの存在も確認されていることから、確実に厦門 (アモイ) には HTLV-1 関連疾患があるはずであり、厦門(アモイ)大学附属中山病院の神経内科には、HTLV-1-associated myelopathy(HAM)が疑われる患者が居るそうで、今回はその患者さんについても検討するとのことであった。

今回の HTLV-1 Meeting in China の懇親会は、ニコンの山口浩平さんに相談したところ、ニコン中国の活動の一環として“ニコンのタベ”として開催して頂くことになった。更に、HTLV-1 Meeting in China での日高薫教授の特別講演「南蛮屏風にみる異国へのまなざし」の中国語への通訳にも、ニコン中国の協力を得ることになった。

### 厦門(アモイ)へ

福岡空港国際線出発ロビーから



1月13日9:43 発にさくら 550 号で福岡 (博多) に向かい、地下鉄で福岡空港に向かい、国内線ターミナルから連絡バスで福岡空港国際線ターミナルに 11:30 頃に到着した。そこで、旅行社の中村清吾氏より、連絡等を受けて、出国ゲートを通り、国際線出発ロビーに出て、中国東方航空 MU518 便 (上海経由武漢行き) に搭乗し、定刻の 13:50 に出発し、中国時間 14:25 過ぎに上海浦東国際空港に到着し、一度入国し、到着ロビーで旅行社のガイドさんに会い、再度国内線の出発ロビーに入り、中国東方航空 MU5563 便 (厦門行き) にて 16:25 過ぎに発し 18:30 頃に厦門国際空港に到着した。

着した。

ケイ恵琴教授と旅行社のガイドの陳さんと会い、専用バスにて海鮮レストランに渋滞の中で 1 時間弱を要して向かいで夕食を摂り、厦門の宿である京ピン (門の中に虫) 中心飯店 (JINGMIN CENTRAL HOTEL) にチェックインした。

旅行社のガイドの陳さんによると、厦門 (アモイ) の呼称の由来は、古代中国 (漢: 紀元前 3 世紀から 3 世紀) の地方政権の一つで現在の福州に都を置いたビン越 (ビンエツ) があり、その南になる泉州、厦門(アモイ)と台湾をビン南 (ビンナン) と呼び、このビン南を中国語の方言であるビン南語でアモイと発音することから、厦門をアモイと呼ぶことになったそうである。因みに、現在でも台湾ではビン南語が話され、台湾からの来訪者はこの地方では普通に会話できるのだそうである。福州は漢代からの国際貿易の盛んな地域であり、その後の長い中国の戦乱の歴史の中で、この地域の人々が営々と居住して来たかは問題

京ピン(門の中に虫)中心飯店 (JINGMIN CENTRAL HOTEL)



のあるところであるが、このアモイの呼称の由来は、また、台湾でも観察される HTLV-1 関連疾患が、このビン南地方で観察される可能性を示唆するものでもあるようだ。

### HTLV-1 Meeting in China (1月14日(水))

ホテルを10時に専用車で出て、会場となる予定の廈門大学の新キャンパスにアモイ島の北の海底トンネルを通過して向かった。現在、開発中の農地の残る丘陵地域に、新キャンパスはあった。

そこで、ケイ恵琴教授と合流して、新キャンパス内を専用車で一回りした後、ケイ教授の招待の海鮮レストランでの昼食に向かった。まだ、新キャンパス周囲には、この海鮮レストランしか無いが結構美味しいと評判のレストランだそうである。

廈門大学の新キャンパス(上)と基礎医学院(下)



基礎医学院神経科学研究所1階ロビーで



昼食後に、新キャンパス内の基礎医学院の神経科学研究所に向かった。会場は、基礎医学院の建物の一つの2Fを占める神経病理研究所の会議室であった。そこで、ニコン中国の上海本社の小川剛史市場部・部長と北京支店の張さんと合流した。張さんは、日高薫教授の特別講演の日本語から中国語への通訳を担当することになっていた。

HTLV-1 Meeting in China の参加者は、神経病理学研究者のスタッフ、大学院学生、神経内科の主任と副主任の教授等で50人余りの中国側の参加者あった。

病理学関係の教授の多くは、冬休みを前に関係のある米国に出張や休暇で出かけてしまったそうである。病理学分野の交流は次回に回し、今回は、神経内科と

### 中国側参加者リスト

HTLV-1 Meeting in China 中国側参加者			
先生 12 人	学生 50 人		
1 邢惠琴 教授	HuiQin Xing	13 曹甜甜 硕士	Tiantian Cao
2 胡天惠 副院长	Tianhui Hu	14 张玉 硕士	Yu Zhang
3 张杰 教授	Jie Zhang	15 叶翔 硕士	Xiang Ye
4 郑维红 主任医师	Weihong Zheng	16 谢勇壮 博士	YongZhuang Xie
5 庄晓荣 主任医师	Xiaorong Zhuang	17 冯团诚 博士	TuanCheng Feng
6 庄江兴 高级实验师	Jiangxing Zhuang	18 张翠林 博士	CuiLin Zhang
7 巴亚斯古楞 副教授	Bayasi guleng	19 钟力 博士	Li Zhong
8 陈小芬 副教授	Xiaofen Cheng	20 周杰超 博士	JieChao Zhou
9 张弦 助理教授	Xian Zhang	21 郭栋 博士	Dong Guo
10 李艳芳 助理教授	Yanfang Li	22 李佳 硕士	Jia Li
11 刘肇绩 主治医师	Zhaoji Liu	23 林惠忠 硕士	HuiZhong Lin
12 参丹奕 验员	Dan Can	24 李光铤 硕士	GuangTan Li
		25 魏孜辰 硕士	ZiChen Wei
		26 余倩 硕士	Qian Yu
		27 熊盼 硕士	Pan Xiong
		28 史新震 硕士	XinZhen Shi
		29 刘桂英 硕士	GuiYing Liu
		30 纪成香 硕士	ChengXiang Ji
		31 李小萍 硕士	XiaoPing Li
		32 牟鹏飞 硕士	PengFei Mou
		33 唐荣 硕士	Rong Tang
		34 张冠云 硕士	GuanYun Zhang
		他	

### Meeting 風景



の研究交流のスタートを切るようになった。

Meeting 前半は、ケイ教授による中国語での HTLV-1 and related diseases の Introduction で始まった。次に、出雲教授の“History of HTLV-1 study in Japan. Why in China now?”の講演であり、恐らく、HTLV-1 関連疾患はこの地域には

## 記念写真



存在するが、診断されていないだけで、HTLV-1 関連疾患を理解することで、それらの疾患を見出すことになるとうものであった。HAM に関して、次に、久保田準教授の英語での HAM: clinical features and pathogenesis の講演と奥村先生の日本語での講演とケイ教授による中国への通訳による鹿児島での初の HAM の病理解剖例の紹介があった。奥村先生の鹿児島での ATLL の疾患概念が確立される前の ATLL 例の紹介が興味を持たれるものであった。その後、厦門大学中山病院神経内科の 2 例の HAM を疑って症例の紹介があり、かなり正確に臨床症状は把握されていると出雲教授は思われたそうである。

その後、休憩となり、基礎医学院の副院長との記念写真を事務棟前の階段で撮影した。

休憩後は、ATLL の臨床について、吉満準教授の ATL: clinical features and therapy と私の Pathology of ATLL and proposal to elucidate ATLL in China の英語での講演があった。

その後、日高薫教授による特別講演南蛮屏風にみる異国へのまなざしがニコン中国の北京支店の張さんの中国への通訳で行われた。この特別講演では、大学院学生にも、中国の屏風の日本への影響やそれ以前の中国の屏風にみる異国の風情とその後の中国屏風の発展を知ることが出来て、好評であった。やはり、華僑の排出地域であることも、異国への興味は昔から強いものがあつたのであろう。

その後、神経病理研究所のケイ教授の教授室と実験室を見せて貰った。

ケイ教授の教授室と実験室

HTLV-1 Meeting in China は無事に終了し、その後は、アモイ島の

## ニコンの夕べ



ホテルに戻り、「ニコンの夕べ」と云う冠懇親会・情報交換会が行われた。基礎医学院副院長、神経内科の主任、副主任、附属中山病院消化器内科のモンゴル族で東京大学の免疫学に留学経験のあるクローン病を研究している巴亜斯古楞教授（Prof. Bayasi Guuleng）らの他に大学院の学生さんらも参加した。この席でも、ニ



コン中国の北京支社の張さんの通訳が大いに役立った。そして、明日は、附属中山病院を臨床が終わる午後 4 時過ぎに訪問するこ

とが決まった。

懇親会終了後、ホテルのラウンジで、まずは HTLV-1 Meeting in China の成功に祝杯を上げた。

### 廈門大学キャンパスとその周辺と附属中山病院訪問（1月15日（水））

9時に、ホテルで、北部の基礎医学院の神経病理学研究所で、HAM 疑いの患者さんの血液と脳脊髄液の抗 HTLV-1 抗体の有無の検索を示教する久保田准教授とケイ教授を見送り、午後4時頃の附属中山病院訪問までの間に、廈門大学キャンパスとその周辺を散策することになった。

胡里山砲台

#### 胡里山砲台

先ず、海岸線を走り、海岸から丘陵地帯に広がる廈門大学キャンパスを車上から見ながら、アヘン戦争から50年後の清末期に建設された胡里山砲台を訪ねた。ドイツ製の超大型大砲は圧巻であった。丁度、古式豊かな清朝期の大砲発射儀式に遭遇した。



#### 南普陀寺



#### 南普陀寺

その後、この廈門島に出城しか無い唐代に創建された南普陀寺を訪ねた。丁度、廈門大学正門前にこの南普陀寺は位置し、最初の頃の建物は古陀山の中腹の岩を彫りその入り口に門を設けたものであった。廈門大学が整備された時期に、南普陀寺にも、仏僧の教育機関が設けられ、東南アジア等に仏僧を排出しているそうである。入口の池の周辺で、お茶をして休憩して、廈門大学を訪ねた。

#### 廈門大学キャンパス

この廈門大学は、この地域の出身の華僑の一人でマイレーシヤでゴムのプランテーションで財をなした陳嘉庚の寄付により整備され、戦後は彼の財団から多額の寄付が来ているそうである。大変綺麗なキャンパスで、陳財団からの寄付による陳校舎や池を囲むような広場等々、非常に観光客には理想的なキャンパスであるようであるが、教室には、たくさんの本で旧正月の冬休み前の試験勉強なのか頑張っている学生が見られた。魯迅博物館は改修中で見学出来なかったが、廈門大学の歴史の展示があったので覗いて見ると、1978年以降の展示しかなく、魯迅が教鞭をとった1920年前後の展示は無かった。

廈門大学キャンパス



#### 華僑博物館



#### 華僑博物館

遅い昼食を駅の近くの三つ星ホテルの21階の展望レストランで摂った。その後、華僑博物館を見学して、やはり南蛮屏風の出来た大航海時代には、アフリカと同様に人身売買にて多くの中国人がヨーロッパやアメリカ等に運ばれた悲惨な時代から自由渡航の時代を経て、世界に展開する華僑会議の時代と変遷し、多くの成功華僑を排出したようである。この廈門を含めた福建省からは東南アジアへ多くの華僑が渡航し、現在のシンガポール等の華僑社会を建設したようである。

## 附属中山病院

午後4時過ぎに、専用車で附属中山病院を訪ねた。訪ねると病院等の玄関の電子掲示板に出雲周二教授一行の訪問を歓迎する表示があった。

## 附属中山病院



## 附属中山病院事務棟会議室



事務棟の会議室にて、李永忠副院長らの挨拶とこの中山病院の説明があり、巴垂斯古楞教授（Prof. Bayasi Guuleng）の日本語の通訳で、臨床検査部のスタッフ、神経内科主任、副主任らの正式な紹介があった。その後、ケイ教授と久保田准教授が神経病理研究センターでの HAM 疑いの患者の血液と脳性気随液の抗 HTLV-1 抗体検査を終えて合流した。その後、臨床検査センターを訪ねた。

## 中山病院臨床検査センター

厦門大学附属中山病院の臨床検査

センターには、最近の重点的整備で、凡そ日本の大型病院等にある検査機器に加えファックス等の機器が整備されていた。最近、民間保険の急速な普及に伴い臨床での種々の検査に基づいた臨床診断と治療が行われる状況になっているのだそうだ。抗 HTLV-1 抗体検査も実際に実施し始めており、外部の病院からの依頼検査の中に抗 HTLV-1 抗体陽性の親子の白血病患者があったそうで、その詳細を居合わせた神経内科の主任教授らとこの患者を基礎に家族や周辺の住民や居住地における HTLV-1 関連疾患の追跡発掘の可能性を討論した。



## 中山病院血液内科



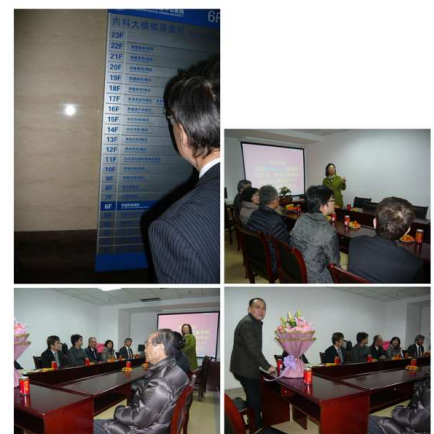
そこで、この中山病院の血液内科を訪ねて、実際に成人T細胞白血病

(ATL) の診断経験の有無を居合わせた血液内科の先生に聞くと、福州の医科大学での研修時代に1例の経験があるが、この厦門大学附属中山病院ではその診断経験はないそうである。福建省の何処かに HTLV-1 感染のある地域がある可能性が強くなった印象であった。上記の2例の抗 HTLV-1 抗体陽性の親子の白血病患者については、その主治医等に確認をとり、詳細な検討を神経内科の先生が行うこ

とを約束された。

## 中山病院神経内科病棟

その後、神経内科の病棟を訪ねた。中山病院神経内科病棟会議室での診察ケイ教授と久保田准教授が神経病理研究センターでの HAM 疑いの患者の血液と脳性気随液の抗 HTLV-1 抗体検査は結果的には陰性であったそうであるが、その2人の患者が出雲教授の診察を受けたいと云うこ



## 出雲教授の診察



とになり、神経内科の病棟の会議室に、即席の診察用ベッドを運び込み、診察が行われ、結果的には HAM ではなく別の疾患ではないかと云うことになった。

## 中山病院神経内科病棟診察後の検討

所謂、HAM の痙性麻痺には大腿の筋肉の脱力低下があり、その違いを出雲教授は自らデモンストレーションして、神経内科の主任らの HAM

ではないと云う点での同意が得られた。やはり、HAM の患者の診断経験は記述だけの理解よりも貴重なものであり、今後、厦門大学の神経内科の若手医師を鹿児島大学に招聘して HAM 診断と臨床を経験させる計画が進行中だそうである。

久保田准教授によると、カリブ海周辺の HTLV-1 感染流行地域では、ATLL の発生は少なく、HAM の発症が多いそうであり、従来から HTLV-1 関連慢性皮膚炎等の疾患が報告されており、南西日本での ATLL の発症の多い HTLV-1 感染流行地とは異なるようである。当初、この厦門地域では HAM の疑い患者の存在からカリブ海沿岸の HTLV-1 感染流行地に類似したものを予測していたそうであるが、臨床検査センターでの今回の情報で、南西日本と同様に ATLL 発症が多く見られるものである可能性が高まった。今後は、上記の 2 例の抗 HTLV-1 抗体陽性の親子の白血病患者からのアプローチと共に、悪性リンパ腫の病理標本の後見的検索による ATLL の再発見とその患者の家族情報等からの中国福建省での HTLV-1 感染流行地の推定の研究が必要になってきたようである。



## 厦門の夜景

その夜は、李永忠副院長の招待で、近くのホテルのレストランで、中山病院の神経内科との懇親会が開かれ、今後の研究交流に関する李永忠副院長と神経内科の幹部医師の同意が得られたようである。懇親会后に、内湾沿いの整備された遊歩道に出て、厦門の夜景と共に中山病院の立地条件の良さを感じた。その後、ホテルに戻り、ガイドの陳さんの勧めで、ホテルの最上階のさくらと云う日本語カラオケラウンジを紹介されたので、そこで、今回の厦門での研究打ち合わせの成功と今度の研究の展開への期待を祝して打ち上げを行った。



## コロンス島訪問と上海へ（1月16日（木））

厦門での 3 日目は予備日と上海経由の帰国へのトランジットの日であった。

## コロンス島

予定の HTLV-1 Meeting in China、HAM 疑い患者の抗 HTLV-1 抗体検査、中山病院訪問が無事に終了したので、厦門の観光スポットの一つであるコロンス島を訪ねた。ホテルでの朝食後にチェックアウトし、専用車に荷物を積み、フェリーでコロンス島に渡った。コロンス島に到着し、電気自動車海岸線を見て、菽莊花園とピアノ博物館を訪ねた。菽莊花園からのコロンス島の景観は素晴らしいものであった。また、コロンス島から見る摩天楼の聳える厦門の街並みは異国情緒豊かで中国での最大級のリゾート地域であることを裏付けるものであった。ピアノ博物館で



は、その多くの収蔵ピアノの多くが華僑からの寄付によるものだそうで、多くのコロンス島は排出したピアニストには感慨深いものであったが、そのピアノを生かした音楽 CD 等は作製されていないようである。

### 旧日本領事館跡

そこから、市街地の抜けて、多くの観光客が行き交う小道を歩き、少し引込んだ小道沿いでは、結婚記念写真撮影の現場を見て、旧日本領事館跡を見た。観光客の行き交う小道に面した旧オランダ領事館も何の表示もなく、廃墟然としていたが、旧日本領事館跡の建物はコロンス島の大学の職員寮となり、正面玄関の中庭には史跡を示す標識はあるものの荒れ果てた状態であった。どうも、コロンス島の開発は、戦前の史跡を活用したものではないようである。上記の整備された菽荘花園は台湾の華僑の別荘として建てられたもので、これは整備されて活用されているが、その他の史跡の活用は行われていないようだ。



### コロンス島から廈門の遠望

また、そこから下った小道にカフェでお茶をして、海岸線に下ったが、以前に報道されていたピアノの練習が聞こえる市街地の小道は過去のもので、別のところに小学校から大学院までの音楽学校が開校しているようである。既に、コロンス島はリゾート開発に伴い、かなり昔の風情は失われて来ているようである。



フェリーで廈門に戻り、遅い昼食を海鮮レストランの飲茶で摂り、空港に向かった。廈門も他の中国の都市と同様に非常に多くの車で溢れ、その交通渋滞はかなりのものであった。上海への便 (MU5682、17:00 発) に間に合うように空港に出発ロビーに出て、ゲートに向かうと、1時間の遅発だそうで、少しお土産の菓子類を買う時間が得られた。出雲教授と共に、カフェでのんびりしていると、出発ゲートも変更になったそうで、急いで、搭乗したものの、機中で夕食が配られて、結果的には、2時間の遅れで飛び、上海紅橋空港には 20:30 頃に到着した。旅行ガイドと落ち合い、遅い夕食を上海の旧フランス租界の“上海がに”が有名というレストランで摂り、どうにかの上海到着を祝い、ホテルにチェックインした。ガイドさんによると、廈門からの飛行機は何時も遅れるそうで、同日の乗り継ぎは、相当な時間的余裕を持った計画が必要であることが判明した。今度の廈門訪問では香港や台湾経由のルートの検討も必要かなと思われた。

### 帰国 (1月17日(金))

ホテルで朝食を早々に摂り、専用車で上海浦東空港に向かい 8:30 頃に到着した。出国し、出発ロビーに出ると、福岡行き (MU517 10:00 発) の搭乗時刻間際であった。出発ロビーで最後のお土産を買うには、上海浦東空港では3時間前の到着が必要であるようだ。定刻に、出発し、13:00 過ぎに福岡空港に帰国した。福岡空港の国内線ターミナルへ空港内連絡バスで向かい、羽田に飛ぶ日高薫教授と別れ、地下鉄で博多駅に向かい、新幹線さくら 555 (14:36 発) で鹿児島島に向かい、16:05 に鹿児島島駅に到着した。改札を出て、鹿児島島からの参加者は解散して、帰宅した。

### 後期

その後、廈門大学附属中山病院神経内科から一週間程度の日程で HAM の臨床の研修に来た。5月11日から5日の出雲教授の調査では、複数の HAM 疑いの痙性麻痺の患者が診断され、福建省の血液センターを兼ねる廈門血液センターでは、廈門で 20 例以上の HTLV-1 健康キャリアーが見い出されているようだ。また、中山病院神経内科では、来年早に、台湾の神経内科医を招いたセミナーが企画されているようで、ピン南地域での HTLV-1 感染の広がりについての情報が得られるようである。

HTLV-1 Meeting in China の企画は、ピン南地域での HTLV-1 感染の広がりについて調査研究の誘導に効果があったと評価しても良さそうである。

中華民国時代の内戦での福建省での HTLV-1 感染状況への影響はあまり無かったと考えても良さそうである。廈門血液センターでの HTLV-1 キャリアーの検出を見ると今後の検索が期待された。